森常樹と草創期の地域教育に関する一考察
―熊本県芦北地域における取り組みを中心に―

犬　童　昭　久

VISIO No.45

九州ルーテル学院大学
Kyushu Lutheran College

December　2015

森常樹と草創期の地域教育に関する一考察
―熊本県芦北地域における取り組みを中心に―

犬　童　昭　久

A Study on Mori Tsuneki and Beginnings of Local Education in Japan

Akihisa　Indo

はじめに

様々な教育課題が山積し、その改善の糸口を模索している現在の教育の状況において、あらためて時代即応の「温かい逞しい心の教育」[1]が一層必要であると感じてならない。「これまで各時代の変革の中で、あらゆる制度が旧から新へと急激に変化した時代では学校も条件や状況が幾度となく変わり、その都度、教師たちに大きな負担がかけられたに違いない。しかし、教師たちはその困難に打ち克ち、常に発展への方向を見失わず、取り組んで来た」[2]のである。なお、その際、草の根的に地域教育の実践を行った人達の存在も忘れてはならない。それぞれの時代、どの地域にも教育に専念し、人々に敬慕された先人達がいたのである。

本稿で取り上げる森常樹[3]（1859～1929）は、熊本葦北郡佐敷（現在の熊本県葦北郡芦北町）に生を受け、明治・大正・昭和にかけて地域教育に尽力した人物である。森は明治十一年（1878）に慶応義塾へ入塾し、福澤諭吉（1835～1901）から直接学んだ。慶応義塾を最優秀にて卒業し、帰郷後は、小学校の校長として中央で学んだ教育の普及に努めている。明治三十年（1897）には福澤から要請で上京し、慶応義塾幼稚舎長（附属小学校校長）を歴代最も長い二十三年間を勤め上げ、慶應義塾幼稚舎の礎を築いた人物とされている。帰郷後は、講演活動等を通して教育の普及と後進の育成に努めた。

森も「温かい逞しい心の教育」を生涯を通して取り組んだ先人のひとりであると考える。森の実践を現代に生きる我々があらためて知ることで、これからの地域教育の実践の参考にすると共に、これからの時代の教育を進める上での一助になるのではないかと考える。

Ⅰ．森常樹の業績に関する時代区分

森がどのような教育理念を持ち、実際にどのような取り組みを行っていたのかについて、教育史料を基に考察する。なお、森の熊本県芦北地域での取り組みについて略述されたものとして次の三編がある。

(1)　佐敷校編『郷土誌佐敷町・教育五十年史』(佐敷尋常高等小学校，1922)
(2)　矢野彩仙『佐敷文教史』(佐敷町役場，1939)
(3)　佐敷小学校百周年記念事業期成会『佐敷小の百年 佐敷小学校創立百周年記念誌』(佐敷小学校，1976)

他には、角田政治『肥後人名辞典』(肥後地歴叢書刊行会，1936)、熊本日日新聞社『九州人国記』(熊本日日新聞社，1966) の記事があるが、二書とも前述の文献の記事によったもので、それ以上は出てこない。なお、『葦北郡誌』『芦北町誌』等も上記の文献に依拠して書かれている。また、山本定信氏によって端的にまとめられた『地域に生きた教育者列伝』(2015) では、芦北地域にて貢献した教育者十一名の中の一人として紹介されている。

そして、慶応義塾幼稚舎長時代の取り組みに関して記載された貴重な資料として、三田商業研究会編,『慶応義塾出身名流列伝』(実業之世界社，1909)、慶応義塾幼稚舎,『稿本慶応義塾幼稚舎史』(明文社，1965)、鈴木信弘,『慶應義塾幼稚舎史料集　第三集　第四代舎長森常樹の人とその教育思想 一次史料編』(慶応義塾幼稚舎，2001)、慶応義塾史事典編集委員会編,『慶応義塾史事典』(慶応義塾大学出版会，2008) がある。論文としては鈴木信弘氏による「森常樹の人と教育思想」(Ｉ) ～ (ＩＸ) (『仔馬』第31巻第５号～第38巻第５号，慶應義塾幼稚舎，1980～1987)、柄越祥子氏による「修身教育にみる一私立小学校の展開 慶応義塾幼稚舎・森常樹舎長時代を中心として」(『杉野服飾大学短期大学部紀要Vol.12』，杉野服飾大学，2013) において森の幼稚舎長時代の取り組みも紹介されている。

本稿では、以上の文献を基に、慶応義塾幼稚舎長時代を除く前後の半世の熊本県芦北地域における取り組みを中心に考察を行うものである。考察を行うに当たり、本稿では、森の業績の時代区分を次のように捉えることとする。

第一期 明治五年 (1872) ～明治十年 (1877)「啓微堂で学んだ後、佐敷小学校助手として勤める」
第二期 明治十一年 (1878) ～明治十五年 (1882)「西南の役後、上京し慶應義塾で学ぶ」
第三期 明治十六年 (1883) ～明治二十九年 (1896)「佐敷小学校教諭後、校長として勤める」
第四期 明治三十年 (1897) ～大正七年 (1918)「慶應義塾幼稚舎長として勤める」
第五期 大正八年 (1919) ～昭和三年 (1928)「芦北地域で教育普及に努める」

森は上記の各時代、各地において教育に従事しているが、第一期と第二期は森の人格形成期としても注目したい。特に後の森の教育展開を行う上での土壌となった出来事や人々の交流についても触れていきたい。また、第三期は郷里で若き校長として辣腕を振るった、しかし苦難にも遭遇している。そこを如何にして乗り越え、振る舞ったかについても注意深く見ていきたい。なお、森は第四期において前述のように慶應義塾幼稚舎の礎を築いていくことになるのだが、その原動力、そして教育思想のバックボーンは何であったのかについても知りたいと考える。

晩年の第五期では、その命が尽きるまで地域教育の向上に情熱を燃やし続けた姿に注目していきたい。以上の考察を通して、森の人物像にも迫りたいと考える。

Ⅱ．第一期 明治五年（1872）～明治十年（1877）「啓微堂で学んだ後、佐敷小学校助手として勤める」

森は、熊本県葦北郡佐敷花岡東にて安政六年（1859）十二月十六日、父は森弥七（士族）、母はちか（矢野惣五郎の長女）の長子として生まれた。佐敷は熊本県南部の葦北郡に属していた町である。佐敷は古くから交通の要衝として栄えてきた。町内には戦国時代の古城跡が点在している。森は八歳より、当時佐敷にあった肥後細川藩校・啓微堂に学んでいる[4]。啓微堂は寛政２年（1790）に細川藩校として創立された。藩士子弟の教育にあたっていたとされる。明治維新後、啓微堂はそのまま佐敷小学校となり、初代校長は高藤正名（不詳）が就任した。佐敷小学校は隣接する水俣・津奈木もふくめた旧葦北郡内最初の公的教育機関であった。高藤は教本として福澤諭吉の著書である『童蒙教草』『世界国尽』『文字の教』を用いており、森が後に慶応義塾の門を叩く素地は、この時からできていたと思われる[5]。

明治五年(1872)に学制が敷かれると森は十三歳で佐敷小学校助手となっている。明治九年(1876)には高藤の後任として能勢政元[6]（1842～1888）が校長となる。能勢は横井小楠[7]（1809～1869）に私淑し、実学派の一人であった。近隣地域には水俣在住の徳富一敬[8]（1822～1914）、一敬の弟で津奈木在住の徳永昌龍[9]（1834～1907）、同じく弟で芦北に養子に来ていた江口高廉[10]（不詳）と共に熊本県南部における実学派の同志であった[11]。森は、この能勢等にも薫陶を受けたと思われる。

なお、能勢が記した『能勢日記』[12]が残っている。郷土史家の山下勉によれば、この『能勢日記』から「明治初期における小学校の構成」を窺い知ることができるとして次のように述べている。

> 当時の『小学校則』によれば、「小学分テ上下二等トス。下等ハ六歳ヨリ九歳ニ至ル。上下合セテ在学八年。但シ、十歳以上ニテ入学ノ者ハ必ズ下等ヲ経テ上等二進ムベシ。在学の長短ハ進業ノ遅速ニヨル。」となっていた。つまり、小学校は、下等科と上等科に分かれ、それぞれ四ヶ年をもって修了する仕組であった。したがって、上下合せて八年間の就学期間となるが、実際は生徒の経済的理由などから、下等科だけで終わる者が多かった。なお、各学年は、前半（六ヶ月）、後半（六ヶ月）の二級から成っていたので、上等科八級、下等科八級の段階があり、生徒は八級から順次昇級したのである。ただし、それは無条件ではなく、進級試験に合格した者だけが許可された。だから、クラスの年令は、今日のように一定ではなかった。[13]

また、山下によれば「進級試験のほかに度々試験を実施したことが記されているが、面白いのは、試験が近付くと休日を返上して授業を行ない、試験終了後に何日かまとめて休んでいることである。ついでに、当時の休日は、毎月一・六の日と教則には定めてあった」[14]とあり、「避寒休業というのがあったが、これは冬休みのことであろう。なお、課業は『一日五時間トス』となっていたが、実際は季節等によって、増減があったようである」[15]と述べている。なお、実際に行われていた教育内容について、当時の小学教則（抄）（明治五年九月八日文部省布達番外）では第六章以下の下等科八級から上等科一級までの指導要領にそれが次のように示されている。

第八級

習字＝片假名、平假名及漢字楷法五画以下ヲ授ク。生徒等級二従ヒ、其席ヲ定メ、教師順廻シテ之ヲ親示ス。

単語＝単語篇ヲ用ヒ、初ハ之ヲ掛板記シ生徒一組ヅツ整列セシメ、教師訓読ヲ高唱シ、生徒一同之ニ準誦セシメ、而後二意義ヲ授ク。但、毎日前日授ル分ヲ熟記シ来ラシメ、一名ヅツ暗誦セシム。若、前者失記スレバ後者ヲシテ誦セシメ、後者能記スレバ、直ニ前上二班セシム。名札ヲ設ケ、日々之ヲ上下シ生徒ヲ鼓舞勧励ス。

但、単語ヲ授ク前二片假名、平假名ヲ掛板ニ記シ授クベシ。

数学＝和洋法兼用ユ。

修身学＝勧学邇言ヲ用ユ。一句ヅツ訓読ヲ授ケ、而後ニ意義ヲ講授ス。

山下は上記を基にして次のように述べている。

その主なものを拾ってみると、下等科七級に進むと右のほかに童蒙読本が加わり、同六級で単語書取り、同五級で地理学、同三級で理学と昼牘、養生法が追加され、一級に進んで大試験を受け、それを合格して上等科に進学できた。なお、このほかの進級試験を小試験と呼んでいた。上等科における学科の内容は、前記の学科を進めたものに、新しく史学、罫画、幾何学等が加わるが、その教科書は、大政日誌、興地志略、内国史略、西史綱記、博物新篇、近世史略、論語、十八史略等であった。[16]

山下によれば、当時の佐敷小学校では、「中庸、物理階梯、物理全誌、化学、文章軌範、日本外史、熊本県地誌などが別にあった」[17]という。このように、学校によっては県が示した『小学教則』とは多少異なる教育がなされていたようである。ちなみに、「佐敷小学校の学級編成は、『級』に当たるものを『舎』と呼び、一舎から十二舎まで編成していた。この『舎』の内容については明確にされてはいないが、一教師が二ないし三舎を受持ち授業をしている。そして、生徒も教則に示された正科生だけではなく、等外生、夜学生が在学していた」[18]とある。

さらに、『能勢日記』で見るかぎりでは、教師も現在のような専門職ではなしに、別に職を持つ者が委嘱される、という形で教育に当たったようであるとし、そのために仕事等の都合で欠勤する教師が度々出ているが、そのときは上級の一舎生が教師の代役を務めており、山下は当時の教師の勤務の状況について次のように述べている。

ところで、教師が別に仕事を持つことは教育に専念できないという不都合があるが、ある意味においては好ましい面もあったのではなかろうか。能勢校長をはじめとする、川村競、今村名興、元山簣成、楠原式行、自坂実弘、森常樹、鵜川常健、黒田、宮崎、片山などは、政界、実業界、産業界の有志でもあったので、実社会での経験を教育に生かしたに違いない。しかし、このような教育も明治十四年に新小学教則綱領が公布されて、大幅に改正された。[19]

また、矢野彩仙『佐敷文教史』（佐敷町役場，1939）には「佐敷校の既往を回顧して」と題し、「昭和十三年十二月十八日、午後一時から新築の佐敷校本館應接間に於いて座談會を開き、吉津邦喜、吉田爾吉、山本長熊（同級生なるも年齢はこの順である。）の長老をはじめ、文學士今村健

人、吉田儀三（佐敷郵便局長）、岩永伸一、それに傍慕役の元山縄男（固書館書司）、主催者側で矢野春太郎（佐敷町助役）、宮邊末雄（佐敷校校長）の諸氏、並びに矢野彩仙が出席した」[20]として、当時の様子が語られている。その中で森が「啓微義塾」に関わっていた事にも触れられている。

啓微堂廃学後、其の名義をついだだけで、場所は今の熊本縣葦北實科高等女學校と末迎寺との中間にあつて、常に多数の生徒が宿泊してゐた。此処には森常樹先生が宿泊して居られたので、生徒は學校から帰ると直ぐ勉強に行つたものである。当時、城山には太鼓があつて、それを打つて朝夕、及び學校の始業時間を報ずるのであつたが、それは義塾に居た営番の者が勤めた。時々、夜間に度胸試しがあつた。先づ妖怪談が一席あつてから、今の今村健人氏宅の上方の墓地に一人宛やられる墓地には前以てお化の造物が番號を附して建てられてある。それを取つて来るのであつた。昼間でさへも物凄い場所である。時にはマッチがつかずして証拠物を探すのに困ることもあつた。やつとの思ひで爽いで帰ると途中に隠れて居られる先生に『ワー！！』と呻かれて度肝を抜かれ居つた。亦た城山の清正公廟にも遣られた。が、實照寺上の「ハゲッパ山」にも駈け足で登された。其の頃は狐が多く、校庭にも出て来るので罠で捕へたこともあり狐公日暮れからのさばり歩き、人様の子は夜間の通行を避ける位で、狐狸が化けると云ふここは一般に信じられてゐた時のことだから、少年の胆力試錬も容易では無かつたらうが、斯ういふ處に森先生の硬教育が窺がはれる。このことは猶ほ其の後も當分引續いて行はれた。[21]

明治初期においては、上記のように地域独特の教育が行われていた。なお、芦北地域は取り囲むように峠が連なり、陸の孤島とも言われたこともあったという。そこに暮らす人々は、当時のめまぐるしく変わっていった時勢とは無縁であったかのように思われていたことであろう。芦北地域には長閑な田園風景を広がっていた。森は明治の初年頃までは、このような教育環境で過ごしている。

Ⅱ．第二期 明治十一年（1878）～明治十五年（1882）
「西南の役後、上京し慶應義塾で学ぶ」

明治十年（1877）、西南の役が勃発する。芦北地域もこの戦火に巻き込まれる事になる。花立三郎によれば当時の状況について、「維新以来、熊本は学校党、実学党、敬神党の三派に分かれて対立したが、敬神党は西南戦争勃発三ヶ月前の明治九年（1876）十月二十四日神風連の乱を起こして自滅した。西南戦争が起こると学校党は約一五〇〇人からなる熊本隊を組織して薩摩軍に参加した。実学派は、薩摩軍の誘いに対し、その封建性を指摘して応ぜず、中立を保った」[22]とある。森は実学派である能勢の組織した佐敷鎮撫隊に加わり、地域の秩序回復に努めたとされる。しかし、官軍の江口英次郎[23]（芦北出身）少佐等が到着すると、佐敷鎮撫隊は官軍を援助する立場となり、両軍が衝突して死傷者が出る事態となった。森自身も足に負傷したとされている。なお、その後、隣接する水俣そして大口方面での一連の戦いは「第二の田原坂」と言われる程の激しい戦闘が行われている。このように、それまでは平和で長閑だった芦北地域が戦火に巻き込まれてし

まったのである。この出来事は青年・森に衝撃を与え、大きな気持ちの変化をもたらしたものと思われる。

その翌年に森は一念発起して上京している。どのようにして福澤諭吉の下で学ぶ機会を得たのか興味深い。史料[24]によれば、この時に森と一緒に上京したのは芦北出身の山本長蔵、浅香恒重、山田健蔵そして、森の四名であったという。

なお、当時、東京にいた江口高廉は森が慶應義塾に入塾する際の証人となっている。ちなみに一敬の子・徳富猪一郎（蘇峰）（1863～1957）等は西南の役の前年に上京しており、小楠門下生の四天王の一人といわれた安場保和[25]（1835～1899）の養子・末喜（1858～1930）は森と近い時期に上京し、慶應義塾に入塾している。能勢、江口、徳富、安場等は共に実学派であり、このように横井小楠の門下生の者達が、挙って熊本から有望な若者を上京させて学ばせようとしている様子が窺える。

森は上京すると、英語を学ぶために、まず、「戸波親信の家に寄食し、薪水の労を執り、余暇を以て熱心に英語を学び、翌年慶応義塾」[26]に入塾したという。その後、浅香と山田は暫くして帰郷し、山本と森のみが四年間学んで塾を卒業している。

明治十一年（1878）に慶応義塾へ晴れて入塾するが、森は福澤諭吉の自宅に寄食していた時期もあったという。森は福澤の次男・捨次郎（1867～1926）とは、この時の縁で晩年まで交流が続いている[27]。森は四年間、勉学に励んだ。森の脳裏には、西南の役で被害を被った故郷に、学んだ事を一刻も早く還元し、復興へ貢献したいという思いがあったものと推測する。このように一心不乱に学ぶ青年の森の姿は福澤の目にどのように映っていたのだろうか。

四年後、森が塾を卒業する際には、福澤は餞（はなむけ）として「皸（あかぎれ）を縫ひし人」[28]という言葉を贈っている。『福翁自伝』には、「少年のとき荒仕事ばかりして、冬になるとあかぎれがきれて血が出る、スルトもめん糸であかぎれの切れ口を縫うて煮え油をたらして手療治をしていたことを覚えている」[29]と福澤自身の若き日を記しているが、苦労して上京し、自分の所へ入塾を申し出て来た青年・森の姿が若き日の自分と重なったのではないだろうか。その後、森は故郷で一教育者として従事するために帰郷する。福澤の心には数多いる門弟の中で、森の姿は殊更印象深く残ったものと思われる。

Ⅲ. 第三期 明治十六年（1883）～明治二十九年（1896）
「佐敷小学校教諭後、校長として勤める」

慶応義塾で四年間学び、優秀な成績で卒業した森は明治十五年（1882）に帰郷する。故郷の葦北郡佐敷に戻り、小学校に奉職している。明治十六年（1883）、25歳の時に芥川定七の六女・ノブと結婚し、同年、病を患った恩師・能勢の後任として佐敷小学校の校長を拝命している[30]。なお、当時の葦北郡とは水俣から日奈久までを含んでおり、明治二十年（1887）には校舎が（現在の芦北町社会教育センターの地に）移転し、芦北高等小学校の校長として転任する。

翌二十一年（1888）には、水俣に芦北南部高等小学校が設立されることとなり、このため芦北高等小学校は芦北北部高等小学校と改称され、森が校長となっている。『佐敷文教史』（佐敷町役場，1939）には、当時のことと思われる「講学会」のエピソードが紹介されている。

其の外『創業と守成』『智仁勇』の順位論等の好題日もあつた。水俣校の来海といふ先生が『勇より智が肝要である。智の無い勇は暴虎馮河といふものだ。』といふ意味のことを言はれたので、佐敷組やそれに加勢する連中は旗色がよくなかつた。そこに慶應義塾を卒業して帰ったチヤキチヤキの森常樹先生が助け船を出して、『やつて見なければ分らぬ。勇氣でやつて見て、はじめてよしあしが分る。而して思慮分別もある。因つて勇氣即ちはまつて見てこそのことだ。』といふことを言はれたこともある。多くの場合、佐敷、湯浦、津奈木と日奈久、田浦、水俣、久木野の二派に分れるのであつた。會員は『何番』と自分の番號を呼んで會頭に發言をもとめるのであつたが、興奮すると、彼方此方から『會頭！會頭！』と叫ぶ。又、『ヒヤヒヤ！』『ノーノー！』『會頭不公平！』などと或ひは怒號し、或ひは机を叩く。宛然摸擬議曾であつた。[31]

このように南部と北部に分かれて議論を闘わせる「講学会」が当時は定期的に行われていたようである。引率者として来ていた森が、旗色の悪くなった生徒に助け舟を出して他の教師や生徒を「あっ」と言わせた一幕があったことが紹介されている。熱意溢れる教師の姿とあわせて論客としての森の姿を思い描くことができるエピソードである。北部高等小学校では森は校長として四年間指導、経営に尽力したとされる。

しかし、森にとって試練となる出来事が起こる。学制改革により明治二十五年（1892）に同校が廃止されたのである。途方にくれる残留の生徒たちを見るにしのびず、森は私財を投げ打って、廃校校舎を借り受け、独力、無報酬でその指導に当たっている[32]。当時の様子が『佐敷文教史』では次のように記されている。

明治二十五年二月、突如、芦北北部高等小学校の廃校が、八代・芦北郡長松崎欣哉より通告された。これによって、就学中の生徒の学習が中断されることになったが、森校長はそれを見るに忍びず、無報酬で教育を続け、その一方では、佐敷村長今村名興、湯浦村長伊藤綱弘、大野村長徳永大蔵らと協議して、三村組合立の高等小学校を設立する準備をすすめた。その結果、翌二十六年一月一日、廃校より九ヶ月目に「組合立葦北中央高等小学校」を発足させた。このときの教職員は、校長森常樹、訓導吉津邦喜、赤沢増記、体操教授方奥村文太郎、裁縫教師林ウキ、赤沢カジュであった。[33]

なお、森は、この間も公立の高等小学校の再開にむけ精力的に奔走し、遂に明治二十六年(1893)一月に組合立の芦北中央高等小学校の開校にこぎつける。再び校長の任につくことになり、その学校の指導経営に専念した。廃校の九か月の間、まさに自力で生徒の授業をつづけたということは、如何に情熱をもって地域の教育に挺身していたかが窺われる。

その後、芦北中央高等小学校の組合立を解き、尋常小学校を併置し、佐敷尋常高等小学校となった。『佐敷小の百年 佐敷小学校創立百周年記念誌』記載の卒業生による回顧談の中では、当時の様子が次のように語られている。

佐敷高等小学校は、船津の旧藩時代の御郡大司屋形跡にあった。表玄関横には、直径五尺（約一米五〇糎）ばかりの中空の松の老木が枝を垂れていた。玄関を中に入れば、つき当りの二部屋が寄宿合で、左すれば広い炊事場付食堂で、右隣室は村役場であった。玄関を入って右すれば、渡廊下で連絡した二階建新校舎、上下四教室の一棟（内一室は教員室）であった。当時本

校には津奈木、湯浦、吉尾、大野、田浦、二見からの生徒もおり、これ等の生徒は皆寄宿舎生活であった。校長はあの有名な森常樹先生で、それに吉津邦喜先生、赤沢増記先生、いずれも村内出（佐敷村）の先生だけ記憶に残っている。私の在学時代の高等小学校は三年制度で、三年の時の学級生徒数三十人、内女子三人で男女共学であった。服装は全部和服、膝が現われるばかりの軽装で、真冬にも足袋なしの奨励、勿論校長先生も率先しての実行であった。昼食は梅干入りの握り飯、どこに行くのも一切徒歩、三里や五里は何でもなかった。(一里は約四粁)」運動会等の催しは稀で、放課後の相撲や陣取り遊びで駈け廻り、雨の日は神社の拝殿で牢屋鬼遊びで駈け廻ったものだった。[34]

ちなみに『佐敷文教史』には、明治二十七年（1894）七月に「ヘルバルトの教育学説唱導」[35]と題して研修会が開催されたことが記載されている。明治期の教育学はドイツ派が主流であり、中央においてはヘルバルト（1776〜1841）の教育学も盛んであった[36]。当時の佐敷には、それを学んだものは森以外には多くはないはずであり、慶応義塾で学んだ教育学を地域に普及しようとしたものと思われる。

このように芦北地域において森は校長として指導、経営、教育普及に尽力している。これらの取り組みは、後の森による慶応義塾幼稚舎での実践の素地になったものと考える。

Ⅳ. 第四期 明治三十年（1897）〜大正七年（1918）「慶應義塾幼稚舎長として勤める」

明治三十年（1897）四月、東京の福澤諭吉より森に三度目の手紙が届く[37]。内容は、幼稚舎長就任の要請であった。佐敷尋常高等小学校の校長職を、これまで訓導を勤めていた吉津邦喜に譲り、森は上京して四代目幼稚舎長（小学校長）となる。福沢は明治三十四年（1901）に死去する。恩師の臨終に際し、森はその決意を新たにしたことであろう。

以後、森はその経営に当たり尽力することになるが、慶応義塾幼稚舎の発展の基礎はこの草創時期、森の努力によって築かれたといっても過言ではない。森が舎長時代に取り組んだ内容で主となるものは『慶応義塾史事典』には次のように紹介されている。

坂田実舎長退任後、大正八（一九一九）年まで幼稚舎長を務める。三田の本校舎、講堂、理科室などの新築、唱歌科の創設、幼稚舎修身要領の制定、諸規則の整備などは、ほとんど森舎長みずからの陣頭指揮のもとに企画・実行された。森によって取り入れられた担任の「六カ年持ち上がり制」は、現在の幼稚舎の特色となっている。また、福沢の「似我の主義」を根底に子どもと担任を結びつけたことや、四一年に福沢の「ひびのをしへ」をもとに「幼稚舎修身要領十箇条」を作成したことなどは幼稚舎の教育の基礎となり、その精神は現在にまで引き継がれている。舎長が校内に住み、舎生と起居を共にしたのは、和田義郎舎長、早川政太郎幹事、坂田実舎長に次ぐもので、舎長として全時間を舎生のために捧げ尽くした二三年間であった。[38]

なお、この慶應義塾幼稚舎長時代には、前述した徳富蘇峰の叔父で江口高廉が発行する雑誌「内外交際新誌」の編集に当たると共に、福澤諭吉の推挙により、当時創刊され有名になった「時事新報」の編集主任となる等、紙上で東都に論陣をはってジャーナリストとしても活躍している。

また、自身の息子たちを芦北から上京させ、慶應義塾幼稚舎や慶應義塾大学において学ばせている。なお、還暦を迎えるにあたり「感懐」と題して森は次の詩を詠んでいる。

歓迎五十九年春

毎興児童心自新　　常に児童と共に自ら新たになり
不管人間窮達事　　人間の窮達の事にかかはらず
唯従賦管生樂天眞　唯だ賦に従いて天真を楽しむ

この詩は常に子どもたちのことを中心に考えていた、如何にも森らしい内容であるという印象を受ける。そして大正八年（1919）に節目として、これまで主任を勤めていた小林澄兄[39]（1886～1971）に舎長職を譲り、慶應義塾幼稚舎を辞して芦北に帰郷している。

Ⅴ．第五期 大正八年（1919）～昭和三年（1928）「芦北地域で教育普及に努める」

大正八年（1919）４月24日に、故郷に帰郷する。その際、佐敷小学校生徒700余名が、（三男の養子先であった）諏訪宮前に整列して出迎えたとある。５月８日には佐敷町有志で盛大な帰郷祝賀会も催されている。

帰郷しても無為に過ごすことなく、佐敷町内の各小学校の学務委員となり、義務教育の一層の充実に努めている。例えば修養団芦北支部長に就任し、社会教育や青年教育にも力を入れ[40]、中央で磨いた識見をもとに地域に「公道会」を組織し、行政の刷新に努めている[41]。また、校長、医者、宗教家、文人等の集いで月三・四回、森の自宅にて「清和会」と称して集会を開き、研究発表会や余技交換等を行う等、積極的に地域の文化活動にも関わっている。

さらには、佐敷小学校同窓会である「一心会」や芦北農林高等学校設立[42]や芦北高等女学校設立にも関わり、芦北地域の教育の発展にも貢献している。関わった主な組織や会合・研修会を挙げると次のとおりである。

(1)　佐敷小学校同窓会
(2)　佐敷公同会
(3)　葦北郡剣道連盟
(4)　田川小学校父兄会
(5)　葦北郡教育総集会
(6)　修養団芦北支部
(7)　葦北郡女教員総会
(8)　葦北郡青年訓練所幹部講習会
(9)　芦北農林高等学校
(10)　芦北實科高等女学校
(11)　清和会
(12)　公道会

森は上記の組織や会合・研修会にて多くの講演を行っているが、講演内容の中で、福澤の代表的な言葉である「独立自尊」についても触れている。「独立自尊」とは、「心身の独立を全うし、自らその身を尊重して、人たるの品位を辱めざるもの、之を独立自尊の人と云ふ」(『修身要領』第二条)。度々講演会にてそのことに触れていることから、常に福澤からの恩を忘れず、その教育思想を普及していく強い思いがあったと思われる。

また、講話内容は衛生学の話から子育て論まで幅広く、例えば大正八年（1919）の小学校教育関係者への講演では、「手洗いやうがいの推奨」や「思慮ある頭脳 Thinking Head」、「親切なる心情 Kind Heart」、「熟練なる手腕　Skillful Hand」、「強靭なる身体Good Health」の「４Ｈ」[43]を心がけるように説いている。大正九年（1920）に地元婦人会から依頼を受けた講演では、子どもたちに「福澤先生の伝記とベンジャミン・フランクリンの伝記を詠ましむる必要がある」[44]と説き、反響があったと「森日記」[45]に自ら記している。

森は生来健康で、年老いても尚、若者をしのぐほど強健だったが、病気を得て昭和三年（1928）11月４日、70歳（数え年）で亡くなる。なお、亡くなる年には次の句を詠んでいる。

さしのほる　旭に露乃　きえはてて　色新たなり　大和島山

森は「葦北」の「葦」の字をとり、「葦峰」と号した。また、その翌年には森を慕う人たちによって、森常樹葦峰先生記念墓碑が昭和四年の一周忌に花岡東の小高い丘に建てられている。熊本県教育会よりこれまでの業績を称え公状が贈られている。

このように慶応義塾幼稚舎時代を除く前後の半世は、まさに地域教育の推進につくした日々であったといえよう。その生涯の努力は多くの人々に感化を与え、今日の芦北の地域発展の基になっている[46]。

Ⅵ．森常樹の教育理念

森の教育理念、実際にどのような取り組みを行っていたのか、当時のその具体的な教育方法との関連も含め、特に熊本県芦北地域における取り組みを中心に教育史料を基に述べた。注目すべきことは次の内容であると考える。

一つに、上京し、慶応義塾で学ぶ機会を得るまでの経緯である。森の業績史料を辿ると、この時代に生きた先人たちは皆、向学心旺盛で使命感を持って生きていたことが伝わってくる。例を挙げるならば、森等が上京する際に親族や地域人を含め、多くの人たちの後押しがあったことを窺うことができる。このことは言わば皆で支え合う「温かい逞しい心の教育」を行うコミュニティが地域に存在していたことを物語っているといえよう。そこには横井小楠から感化を受けた能勢等、実学派の者達の後押しがあったことも見逃すことはできない。併せて、森もまた典型的肥後人「肥後もっこす」であったのであろうということがいえる。これもバックボーンの一つであったと考える。

次に、直接、福澤諭吉から学んだ教育精神の普及に努めたことである。森が帰郷後の取り組みに貫かれていることは、「独立」や「実学」など慶應義塾が大切にしている教育理念であったであろう。なお、「慶應義塾の目的」と呼ばれる次の一文がある。

慶應義塾は単に一所の学塾として自から甘んずるを得ず。其目的は我日本国中に於ける気品の泉源、智徳の模範たらんことを期し、之を実際にしては居家、処世、立国の本旨を明にして、之を口に言ふのみにあらず、躬行実践、以て全社会の先導者たらんことを欲するものなり[47]

この一文は常に森の胸中にあったものと思われる。芦北での取り組みでも、学問を修める過程で「智徳」とともに「気品」を重視し、社会の先導者にふさわしい人格形成を志すことを重要視していたことを窺う事が出来る。また、芦北北部高等小学校廃校の際には、森は私財を投げ打って廃校校舎を借り受け、独力、無報酬でその指導に当たった。如何に情熱をもって地域の教育に挺身していたかが窺われる出来事であった。この教育にかける情熱こそ、福澤から感化を受けたことの中核であったであろうと考える。

三つに、故郷を愛する思いの強さである。慶應義塾幼稚舎を去り、帰郷後も森は中央で学んだ事を再び地元に還元し、後進の育成にも余念がなかった。地域の子弟に対して質の高い教育の普及に努めることは国の根幹であると捉えて実践を行った。慶應義塾での人脈を活かして取り組んでいることも注目される点である[48]。

言うなれば森は、熊本の偉人・横井小楠の思想を受け継ぐ実学派によって取り組まれた教育環境の中で育ち、そして、福澤諭吉という教育の巨人が唱えた教育理念を受け継いで、これらを合わせ持った森独自の教育理念へと結晶させたのではないだろうか。その意味でも森は明治・大正・昭和を生きた希有な教育実践家であったと言える。それ故、森の実践を更に整理し、今後もその存在を普及する必要があると考える。

おわりに

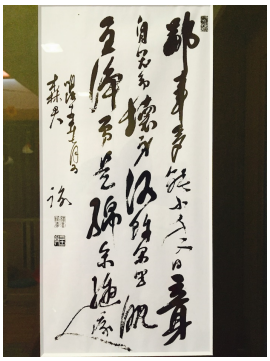
芦北地域が昔から教育に熱心な土地柄であったことをあらためて窺い知ることができた。これ等の教育精神は現在の芦北地域に脈々と息づいており、本稿では充分に論じる事ができなかったが、他にも能勢政元をはじめとする多くの優れた先人がおり、後に森から感化を受けたと思われる教育者達へ、その精神は受け継がれていていったことが関連文献[49]から窺い知ることができた。

福澤諭吉から直接学び、「皺（あかぎれ）を縫う」程に努力し、地域教育の発展に努めた先人がいた、その誇らしい記憶は次代にも襷として渡され、さらにつながってひろがりを増し、今後も「温かい逞しい心の教育」が展開していくことを願って止まない。

謝　辞

執筆に際して御助言下さった芦北町の山本定信先生並びに西忠温先生、慶應義塾幼稚舎関係者の皆様、元教諭・鈴木信弘先生、熊本県及び東京都と神奈川県在住の森常樹の御親族の皆様に深く謝意を表したい。

資　料



※いずれも関係者より画像使用許可を頂いている。

【資料１（写真左）】「文に曰く『鄙事に多能な力年少の春には立身して自ら笑う却って身を壊るを浴餘閑かに坐せば肌は全く浄し會て是れ綿絲もて皺を縫いし人』明治15年７月　森君の為に」（慶應義塾提供）所収

【資料２（写真中央）】「日付：明治36年３月　尋常科卒業写真」（西忠温氏提供）所収

【資料３（写真右）】「日付：明治42年４月16日　森常樹（51歳）の肖像写真」（犬童昭雄氏提供）所収

【森常樹関係年表】

年代	年齢(数え年)	経歴	時事、（　　）は芦北地域の沿革
安政六年（1859）	１歳	佐敷花岡東にて父・弥七、母はチカの間に生まれる。	安政の大獄～1858
明治元年（1867）	８歳	啓微堂に学ぶ。	明治維新
明治五年（1872）	13歳	佐敷小学校助手となる。	７月、学制発布 （同月、佐敷郵便局開設。）
明治十年（1877）	18歳	能勢政元の鎮撫隊に入り、地域の秩序回復に努める。	２月、西南の役起こる。
明治十一年（1878）	19歳	慶応義塾へ入塾する。	
明治十二年（1879）	20歳		９月、教育令制定される。
明治十五年（1882）	23歳	慶応義塾で四年間学び、七月二十六日帰郷する。	
明治十六年（1883）	24歳	佐敷小学校に奉職する。十一月十四日家督を継ぐ。芥川定七の六女・ノブと結婚する。	
明治十七年（1884）	25歳	佐敷小学校の校長となる。	徳富蘇峰が熊本の自宅に「大江義塾」を開く。
明治十九年（1886）	27歳	福澤諭吉より二度目の出京勧誘の手紙が届く。	５月、教科書検定制度の成立 小・中・師範学校令公布
明治二十年（1887）	28歳	芦北高等小学校の校長となる。	
明治二十一年（1888）	29歳	芦北北部高等小学校の校長となる。	
明治二十二年（1889）	30歳		２月、「大日本帝国憲法」公布 市町村制が敷かれる。
明治二十三年（1890）	31歳		10月、新小学校令　教育勅語 小学校教則大綱制度
明治二十五年（1892）	33歳	芦北北部高等小学校が廃止。	学制改革
明治二十六年（1893）	34歳	組合立芦北中央高等小学校開校。再び校長の任につく。	11月、事業補習学校規定制定
明治二十七年（1894）	35歳	「ヘルバルトの教育学説唱道」研修会開催	７月、日清戦争
明治三十年（1897）	38歳	10月　上京し、第四代幼稚舎長に就任、新校舎の移転	４月、佐敷尋常小学校と芦北中央高等小学校との合併によって佐敷尋常高等小学校となる。
明治三十二年（1899）	40歳	８月、制服を改良す。（七つボタン、短ズボン） １月、初めて風琴を新調して唱歌科をおく。	中学校・高等女学校・実業学校令公布 ８月、私立学校令公布

明治三十三年（1900）	41歳	４月、幼稚舎寄宿舎に水道入る。 ７月、福澤諭吉「今日子供たる身の独立自尊法」伝々の書を幼稚舎に持参せらる。	８月、小学校令改正　尋常小学校を四年生に統一
明治三十四年（1901）	42歳	１月、幼稚舎に於て在塾学生同窓会開かる。 ２月３日、福澤諭吉逝去 ５月、幼稚舎修身要領（六ヶ条）なる。	
明治三十五年（1902）	43歳		
明治三十六年（1903）	45歳	３月、一年間全出席者表彰する制席を開く。 ９月、学校暦を初めて作る。12月、網町運動場を購入する。	３月、専門学校令公布 ４月、教科書国定制となる。 （11月、佐敷村が町制を施行し佐敷町となる。）
明治三十七年（1904）	46歳	６月、初めて早慶野球戦を行う。	２月、日露戦争　全国一斉に国定教科書使用
明治三十八年（1905）	47歳	９月、幼稚舎にて初めて理科実験を行う。 11月、東郷大将以下海軍高級武官を歓迎会が催され、幼稚舎生も参加する。	
明治四十年（1907）	49歳	４月、慶應義塾創立五十年記念式挙行 12月、幼稚舎講堂が落成する。	小学校令改正　義務教育六年となる。
明治四十一年（1908）	50歳	９月、幼稚舎修身要領（十ヵ条）成る。 12月、修業式当日に初めて速算会を行う。	尋常小学校六カ年の義務教育制度が成立（３月、国道三太郎峠開通） （６月、八代と人吉間の鉄道開通）
明治四十三年（1910）	52歳	６月、理科実験室が落成する。	４月、第二期国定教科書使用開始
明治四十四年（1911）	53歳	１月、上学年の一部を二学級とする。	
明治四十五年（1912）	54歳	２月、寄宿舎裏に50坪の大土俵を建設する。	明治天皇崩御
大正二年（1913）	55歳	舎長住宅用として、寄宿舎に一室を設く。	
大正三年（1914）	56歳	８月、「慶應義塾小学科幼稚舎要覧」刊行	８月、第一次世界大戦参加
大正四年（1915）	57歳	５月、明治神宮の献木活動に参加す。 ７月、葉山の水泳宿舎落成。夏麦藁帽着用を許可する。	
大正五年（1916）	58歳	３月、森常樹「卒業生を送る歌」を作詞、採用す。 上学年有志による夏季旅行を行う。新一年生より二学級となる。	
大正七年（1918）	60歳		４月、第三期国定教科書使用実施 （同月、佐敷に電灯がつく）
大正八年（1919）	61歳	芦北へ帰郷する。佐敷小学校同窓会にて講話。佐敷公同会入会の詞を述べる。	小学校令及び施行規則の改正
大正九年（1920）	62歳	10月、葦北郡教育総集会（於水俣）にて講話。７月、田川父兄会にて講話。青年修養団芦北支部長就任。月未詳、補修学校修了生に対する祝辞。10月、葦北教育総集会にて講話。	（４月、佐敷町役場に電話が設置される。）
大正十年（1921）	63歳	皇太子殿下御安着奉祝会に参加。（月未詳、「公道会」または「清和会」において）葦北郡小学教育に関する講話。	
大正十一年（1922）	64歳	芦北農林高等学校設立。	
大正十二年（1923）	65歳	葦北郡女教員総会にて講話。	９月、関東大震災
大正十三年（1924）	66歳	６月、県立芦北農林高等学校にて講話。	
大正十五年（1926）	68歳	１月、町長選挙に際し、候補に上がるが辞退する。 11月、福澤捨次郎逝去。	12月、大正天皇崩御
昭和二年（1927）	69歳	３月、県立芦北農林高等学校卒業式にて講話。５月、慶応義塾野球部に「故森茂樹氏祈念カップ陳列棚」寄贈。９月、葦北郡青年訓練所幹部講習会にて講話 芦北實科高等女学校設立。	（２月、佐敷川氾濫による洪水）
昭和三年（1928）	70歳	３月、県立芦北農林学校卒業式にて講話。９月、清和会で「彼岸会」を行う。11月４日逝去。	２月、初の衆議院普通選挙 ４月、算術教科書メートル法採用

注

1　「温かいたくましい心の教育」とは、山本定信氏の『地域に生きた教育者列伝』(2015) における「はじめに」に述べられている次の文章を基にしている。「今日、不登校やいじめ問題等があり困惑していますが、今こそ時代即応の『温かいたくましい心の教育』が一層必要ではないでしょうか。この列伝集の先生方の偉大な実践活動を知って頂くと共に、目前の子どもたちの教育、しつけの参考に少しでもつなげて頂けたらありがたいことです」(山本定信,『地域に生きた教育者列伝』, 2015, p. 2)

2　郷土史家・山下勉の文章を基にしている。(佐敷小学校百周年祈念事業期成会,『佐敷小の百年　佐敷小学校創立百周年記念誌』, 1976, pp. 51-58)

3　森の人物像として次のように評されている。「夙に日新の学術を修め温厚篤実の資を以て自らの主義主張の有るなり、辺幅を飾らず他の富貴を羨まず、一意専心教育の信義憧れ義塾卒業の後、帰郷して小学教育に従事する事十四年、効果実に顕著たるものあり、終に義塾に招聘せられて、幼稚舎舎監となる。自ら云う。『幼童を教育し楽しみて老を忘る之れ人生の私服なり』と。氏の如きは我が理想の小学教育家に非ずや」(三田商業研究会編,『慶応義塾出身名流列伝』, 実業之世界社, 1909, p. 903) (資料３は肖像写真)

4　佐敷小学校百周年記念事業期成会,『佐敷小の百年　佐敷小学校創立百周年記念誌』, 1976, pp. 51-58.

5　鈴木信弘,「森常樹の人と教育思想」,『仔馬』185号, 慶應義塾幼稚舎, 1980, pp. 88-89.

6　「能勢校長は、幕末の志士、横井小楠に私淑して、新しい思想の影響を受けていたせいか、見識が高く、いち早く銀行や汽船会社などの近代産業を、佐敷に導入した人である。学校経営においても、公同社なるものを興して、経営体制の組織化と財源の確保に努め、広く生徒を集めて学校の発展を促進した。だが、庶民の間に教育の必要を認める思想が、まだ広く定着していない時代に、このような新しい方策を進めることは、容易な業ではなかったろう。したがって、能勢校長は、戸長（行政長の一種）として、あるいは郡会・県会議員として、社会啓発のためにも精力的に動き回わった。」(佐敷小学校百周年記念事業期成会, 前掲『佐敷小の百年　佐敷小学校創立百周年記念誌』, pp. 51-52.)

7　横井小楠（1809～1869）は幕末の熊本藩士・政治家・思想家。名は時存、字は子操、通称平四郎。元田永孚等と実学党をつくり、私塾小楠堂で子弟を教育する。のち福井藩主の松平慶永（春嶽)に招かれて藩の政治顧問となり、藩政改革を指導、さらに慶永が幕府政事総裁となるとその政治顧問として幕政改革を推進し、維新後は明治新政府の参与となった。

8　徳富一敬（1822～1914）幕末から明治にかけての儒学者（朱子学者)、官僚、教育者、徳富蘇峰・盧花兄弟の父であり、淇水と号した。

9　徳永昌龍（1834～1907）は徳富一敬の弟である。水俣の徳富家から津奈木の徳永家に養子に来ている。

10　江口高廉（不詳）も徳富一敬の弟である。水俣の徳富家から芦北（湯浦）の江口家に養子に来ている。通称淳三郎。元治元年 (1864) には海軍操練所にて学んでいる。維新後、治河掛付属として出仕するが、明治十年に辞し、明治十二年10月に「内外交際新誌」を創刊している。

11　「小楠の兄・左平太が葦北郡代をしていた頃、湯浦や佐敷の忽庄屋をしていたのが直方の父と一敬の父である。」(花立三郎,『横井小楠の弟子たち』, 藤原書店, 2013, p. 492) とあり、芦北地域に縁のある人物として矢島直明（1794～1855）がいる。矢島は湯浦郷に赴任していた時、徳富美信（不詳）と親しくしており、その縁で直明の子・直方と美信の子・一敬は共に横井小楠の最初の門下生となったとされる。

12　佐敷校編,『郷土誌佐敷町・教育五十年史』, 補遺「能勢日記」, 佐敷尋常高等小学校, 1922.

13　佐敷小学校百周年祈念事業期成会, 前掲『佐敷小の百年　佐敷小学校創立百周年記念誌』, pp. 52-53.

14　同上, p. 53.

15　同上, p. 53.

16　同上, pp. 53-54.

17　同上, p. 54.

18　同上, p. 54.

19　同上, p. 54.

20　矢野彩仙,『佐敷文教史』, 佐敷町役場, 1939, p. 90.

21　森が上京し、慶應義塾に入塾する前のエピソードと思われる。(矢野, 前掲『佐敷文教史』, p. 90)

22　花立, 前掲『横井小楠の弟子たち』, pp. 375-376.

23　江口英次郎（高確）（不詳）は後に鹿児島県知事に任ぜられたが、赴任の途中で逝去した。（鳥居正直，『遺稿わが生涯（下）』，1994，pp.291-292）

24　鈴木信弘，「森常樹先生累歴」，『慶應義塾幼稚舎史料集　第三集　第四代舎長森常樹の人とその教育思想 一次史料編』，慶応義塾幼稚舎，2001，p.8.

25　安場保和（1835～1899）は、近代日本草創期の政治家。華族に列して男爵となっている。

26　戸波親信は英学者・何礼之の私塾「瓊江塾」で学んだ元・和歌山藩士である。（三田商業研究会編，前掲『慶応義塾出身名流列伝』，p.904）

27　鈴木，前掲『慶應義塾幼稚舎史料集　第三集　第四代舎長森常樹の人とその教育思想 一次史料編』，pp.178-179

28　同上，p.168.（資料１）

29　福澤諭吉，『福澤諭吉著作集 第12巻 福翁自伝 福澤全集緒言』，慶応義塾大学出版会，2003，pp.398-399.

30　山本，前掲『地域に生きた教育者列伝』，2015，p.3.

31　水俣に芦北南部高等小学校が設立された時期のエピソードであると思われる。（前掲，矢野，p.3）

32　芦北町誌編集委員会編，『芦北町誌』，芦北町役場，1977，pp.595-596.

33　矢野，前掲『佐敷文教史』，p.3.

34　佐敷小学校百周年祈念事業期成会，前掲『佐敷小の百年　佐敷小学校創立百周年記念誌』，pp.57-58.（資料２）

35　矢野，前掲『佐敷文教史』，p.5.

36　山本正身，「日本におけるヘルバルト派教育学の導入と展開」，社会学研究紀要　第25号，1989，pp.67-74.

37　史料にて確認できるものとしては、福澤からの出京勧誘の手紙はこれが三度目である。一度目は明治十五年に帰郷して直に届いている。二度目は明治十九年に届いている。

38　稿本慶応義塾幼稚舎史事典編集委員会，『慶応義塾史事典』，慶応義塾大学出版会，2008，p.766-767.

39　小林澄兄(1886～1971)は、明治44年慶應義塾大学部予科教員兼普通部教員を務めたあと、大正３～６年慶応義塾留学生となり、独・仏・スイスに学ぶ。慶応幼稚舎・普通部の主任、慶應義塾大学文学部長などを歴任した。

40　青年訓練所とは「大正十五年（一九二六）四月二十日勅令第七〇号によって青年訓練所令は発布され、今まで各小学校に併設されていた実業補習学校に併設されて青年の心身を鍛錬し、健全で善良な国民を育てることになった」（芦北町誌編集委員会編，前掲『芦北町誌』，p.600）とあり、森は芦北支部長に就任している。

41　森は町長選挙において候補として上がった事があった。「大正十五年一月の佐敷町長任期満了にともなう町長選挙において、その選出をめぐって政友・憲政両派の激しい闘争がある。（中略）中立派から町長候補を出すことになり、今村健人氏と森常樹氏が推された」（同上，「地方政治の変遷」，p.565）

42　芦北農林高等学校設立には、当時・町会議員だった次男・芥川春樹が関わっており、「大正十年、当時の芦北郡視学佐藤眞佐男氏の主唱で、郡会議員及郡内各町村の有志の協議を重ね、同年三月三日文部大臣から郡立芦北農林学校設立の認可を受けた」（同上，「芦北の教育の発展」，p.598）とあり、森も尽力したとされる。

43　前掲，鈴木，「４Ｈ」，p.100.

44　芦北町誌編集委員会編，前掲『芦北町誌』，p.627.

45　前掲，鈴木，「森日記」，p.169.

46　山本の言葉を基にしている。（山本，前掲『地域に生きた教育者列伝』，p.3）

47　慶應義塾ＨＰ（http://www.keio.ac.jp/ja/contents/mamehyakka/53.html）における「慶應義塾の目的」より

48　一例としては、森が入塾した時の在学生で後にも交友があったと思われる人物に美澤進（1849～1923）がいる。美澤が創設に関わった横浜商法学校で英語を学ぶよう娘婿に薦めている。

49　前述の山本氏は芦北町地域の学校の沿革誌や記念誌を参考に、明治から昭和にかけて活躍した11人の伝記を執筆し、芦北町の郷土誌「野坂の浦」に11回に分けて掲載した内容を１冊にまとめている。なお、本内容を掲載していた郷土誌『野坂の浦』は、「芦北での出生如何を問わず、芦北の風土や人情をこよなく愛し、芦北の伝統文化等を見直し、芦北地域進展の機運を盛り上げようと」発足した「芦北ふるさと会」が母体として誕生し、現在「第六十一号」を発刊している。これまでの芦北の歴史・文化・教育の様子を知ることのできる郷土誌である。